

## コメント (1) : 夢=記憶の再構成と言語

渡辺直紀

西先生の発表文、とても楽しく読ませて頂きました。以下、質問をいくつかに分けてではなく、全体的に雑駁なコメントを述べさせていただきますことをお赦し下さい。

先生の発表文を読んでとても驚きました。私も小説における言語使用において、「夢」が果たす役割のことを考えていたからです。先生は発表文の最後の方で、金石範の『地底の太陽』の作品世界を論じながら、作者が主人公たちに見させる夢の問題について言及しています。私が今、ここに座っているのは、私が以前、韓国で書いた論文「中西伊之助の朝鮮関連の小説について」<sup>1)</sup>が西さんの目にとまったため、今回も西さんの論文にある中西論について何かコメントを言うことが求められているのだらうと思います。私はこの自分の論文で夢のことをひとつも言っていないませんが、実はこの中西論を書いたとき、私が考えていたのは、明らかに次のような、夢の見方に関することでした。

私の友人で、その論文執筆時も、そして現在も、アメリカで韓国文学を教えている韓国人性がいます。どこでのことだったかは忘れましたが、その彼女とのやりとりの中で、次のような話がありました。アメリカの大学で、植民地時代の朝鮮の文学（朝鮮語によるものも、日本語によるものも）を学生に教えます。長いものは難しいけれど、短いものをいろいろと英語訳などを通じて読ませて、当時の朝鮮の思想状況や民族主義、あるいは植民地状況のことについて理解させるのが授業の目的です。彼女の努力の甲斐もあり、1学期無事に授業を終えたとき、かなりの学生が「よく理解できた」と言ってくれるのだそうです。でも、そのようによく理解した学生にかぎって、これもまたかなり高い確率で次のような感想をもらすのだそうです。——「とてもよくわかった。だけど、小説の中にどうして日本人が出てこないのか？」

この学生たちの述懐はきわめて正当なもので、その話のオチを聞いて、私もなるほどと膝を叩きました。植民地朝鮮の朝鮮語小説の特徴のうち、とても重要なことをこの学生は指摘しているのです。日本の〈外地〉文学、ないしは植民地文学に関心がありながら、実際にそれに対する本格的な研究に踏み込んでいない人たちの、おおかたの予想とは異なり、植民地朝鮮では非常に多くの朝鮮語作品が発表されました。朝鮮人作家らによる創作のほとんどは朝鮮語でおこなわれたと言ってもいいでしょうし、1945年の前半にも時局とさほど関係のない歴史小説を日本語ではなく朝鮮語で連載していた著名作家がいたと言ったら、たとえば同じ日本の植民地であった台湾の文学研究者らは卒倒するでしょう。もちろん植民地朝鮮にも公教育における「国語」（日本語）常用政策はありましたし、それによって学生時代に苦痛を受けたという人は多数います。ただし、そのことが作家の創作上の苦悩として問題視されたのは、朝鮮半島においては解放後、1950年代にかけての話ではないかと思います。かなりおおざっぱで図式的な話になりますが、植民地の作家たちで実質的に日本語でしか読み書きができなくなる世代が優勢にな

るのは、台湾では1930年代の中盤以降であったとすれば<sup>2)</sup>、朝鮮では、少なくとも植民地時代にはそのようなことはありませんでした（おそらくこれは植民地化の期間の長短と世代形成の問題が関連していると思います）。もちろん、張赫宙や金史良のような日本語作家の存在は1930年代中盤あたりからありますが、それはきわめて特殊な事例で、だからこそ彼らは東京文壇（日本語）と京城文壇（主として朝鮮語）を往復しながら、きわめて特殊な役割を果たしたのではないかと思います。そのようにして生産された植民地朝鮮における文学作品の中に、日本人が登場する事例はほとんどありません。きわめて少数かつ特殊なテーマ、たとえば日本人と朝鮮人の結婚（内鮮結婚）を扱った作品で日本人が登場することはあります。その場合の日本人はすべて女性です。作者は作中の朝鮮人青年の立場から日本人女性を描くからです。

話を元に戻せば、この話をしてくれた彼女は、さきほどの学生の述懐に関する話を多少、なぜか苦笑気味に語っていたことを覚えています。その場で話した他の話題から察するに、その苦笑は、英語圏の小説には、被植民者と植民者（英国人）がたくさん出てくる、フランス語圏のものでも同様だ、でも植民地朝鮮の小説には、特殊なケースを除いて、ほとんどの場合、日本人が出てこない、これをポストコロニアル文学としてどう分析できるのか、できないのか……というようなものでした。そして、これもまたなぜか、私も彼女の苦笑の雰囲気をそこで共有したのでした。

その日、帰宅後も、そのことをぼんやり考えていました。そこで、ふと、日ごろ、大学で授業の合間に学生に言っている、外国語学習に関する持論のことを思い出しました。——外国語で夢を見るくらいになれば立派だというのが、あれはウソだ。私など何度も見た。自分が普段、韓国語で対話している人が夢のなかに出てくれば、自分も自然に韓国語を話している。日本語で話す人が出てくれば自分も日本語で話している。それだけのことだ。実に自然なことではないか？——そして、かなり牽強付会ですが、そのことになぞらえて、植民地朝鮮の小説に日本人が出てこない理由を、多少興奮気味に彼女にメールで説いてみたのです。つまり、言語能力の如何に関係なく、植民地朝鮮の作家の夢のなかに出てくるほどの日本人はいなかったのだと。韓国語で切り取られる言語空間には、夢のなかにさえ、日本人は登場しなかったのだと。そしてそれは、ほとんど日本語でしか創作しなかった金史良や張赫宙の場合もそうでした。彼らの作品にも日本人はほとんどまったく登場しません。彼らは、自分たちが朝鮮語で見た、朝鮮人ばかりが出てくる夢を、日本語にして日本の読者にぶつけていたのでした。言い方を変えれば、彼らはそのような意味における、日本語で朝鮮人を造形する前例、ないしはプロトタイプを、その後の在日朝鮮人文学の作家たちに残したとも言えます。

こう説明すると、メールを受け取った彼女も、とても面白がってくれました。でも、そのときあったことはここまでです。それ以降、彼女もそのようなやりとりがあったことを忘れているでしょうし、私も夢の見方と小説の言語のことについて、さほど深く考えることもなく、また、そのようなアナロジーは、もう少し古今東西の小説や、あるいは精神分析に通暁している先生方がするべきで、あるいは誰かがどこかでもうすでに理論化しているだろうくらいに思い、何もせずにいました。だから、西先生の今回の文章を読んで、少し興奮せざるを得なかったのです。先生が、ここで中西や金石範のことについて行っている言及は、私も以前から考えていたこととかなり重なる部分がありました。そして、10年前に考えていたことを、多少なりとも整理す

るきっかけとなりました。

アメリカの友人と上のようなやりとりをしていたときに偶然読んでいたのが、先生も発表文で言及されている、中西伊之助が1920年代に書いた朝鮮関連の小説でした。ご指摘のように、中西の朝鮮物の作品には共通して、朝鮮語を少し解する日本人が登場します<sup>3)</sup>。そのことが、日本語(がやりとりされる)空間と朝鮮語(がやりとりされる)空間を、ひとつのフィクションのなかに同時に現出させ、また異言語の切断/接触面のようなものを示しています。私が拙文で、中西の、特に「緒土に芽ぐむもの」に見られるこの切断/接触面のことを、「齟齬」と表現したのは、そこで、もともと並立して提示できていた日本語空間と朝鮮語空間を、日本人と朝鮮人が同時に登場する場合には、日本語空間の方を優先させているために、朝鮮語空間では中心的な人物だった朝鮮人・金基鎬が、そこでかなり後景化してしまっていることを、一種の「ずれ」の問題として指摘しようとしたもので、それを作品上の欠陥として指摘したわけではありません。そのような中西における小説の一言語使用を指して、先生が「その後の張赫宙や金史良にすら真似できぬほどのスリルとサスペンス」が感じられると言っているのには、いろいろな意味が含まれていると思います。中西の小説が、実にサスペンス物、大衆的な娯楽小説のように読める部分もあるという点は、ここでひとまず措くとして、それは、張赫宙や金史良の小説が日本語で書かれているものの、そこに登場するのが朝鮮人ばかりで、日本に住む朝鮮人のことを書いていても、基本的にモノリンガルな空間を描いていればよかったということとも関係があるだろうと思います。つまり、だからこそ、上で私が言った、異言語の切断/接触面を、彼らはひとつの小説のなかに提示せずに済んだのです(ですが、張赫宙や金史良がそのような場面を描かなかったこと自体は、別途、検討の対象になるかもしれません)。

西先生が発表文の後半で言及されている、金石範の作品世界も、そのような意味で張赫宙や金史良のそれと系譜を同じくするものですが、金石範の作品世界には、さまざまな角度で戦後状況のポリティクスが大きく作用しています。そのひとつとして、二言語使用(バイリンガリズム)が朝鮮人の内面に引き起こした深刻な葛藤を、金石範が凝視し、描いている点を先生は強調されていますが、私も今回、あらためて強く、そのように感じました。金石範が総連組織と葛藤関係になるのは、1950年代中盤・後半のことで、1960年代後半の「民族虚無主義論争」で組織離脱が決定的になります。この論争は表面的には日本語創作の是非をめぐる論争のように見えますが、もしかしたら、先生が指摘するような複雑な事情、すなわち、戦後の在日朝鮮人において「日本語が果たしていた役割に、一定の光をあてるという練りに練られた方法論」をめぐって、金石範自身、より葛藤していたせいかもしれないと強く思うに至りました。

平たく言って、言葉が異なれば、当然のことながらアドレスも異なってきます。何語で書くか、誰に向かって書くか、当時の在日朝鮮人らの「いま・ここ」の言語状況をいかにして描くか、ということは、金石範にとってとても切実だったと思います。金石範は近年、以下のように言っています。「なぜ日本語を使わなければならないか」。私も小説を書くようになってこの矛盾に非常に悩んだ。/金達寿氏は、日本の読者にわかってもらうために日本語で書くという言い方をしているが、言葉って、文学はそんな方便的なものではない<sup>4)</sup>。これは一見、彼がアドレスの問題を否定しているように見えますが、実はそうではないでしょう。誰に向けて、というアドレスの問題は、単に読者の問題だけでなく、自分自身に向ける言葉がどのような言語である

べきか、という問題も含むからです。

金石範や金時鐘の世代とはちがって、金鶴泳や李恢成らの世代、あるいはさらに李良枝や柳美里など、後続の在日文学の作家たちは、基本的に韓国語空間を描かないし、描けないので、ここで扱う「一言語使用」の問題や、異言語の接触の問題対象からは、やや離れる作家たちではないかと思えます。これは、一世とそれ以降という世代の違いや、言語能力の差異に還元して説明することもできるでしょう。ひとつだけ、今回のテーマに関連して重要なのは、李良枝の「由熙」(1989, 第100回芥川賞受賞)でしょうか。ただし、この作品は、母国留学のソウルで言語の問題になやむ由熙の孤独な内面を描くと同時に、それを遠巻きに見ながら気を揉んで思いやる韓国人たち(下宿のアジュンマ(おばさん)やオンニ(おねえさん))の内面も同様に、透明に、遠近をつけずに描写しています。両者の間に感情的・言語的な溝やすれ違いがあるべきなのですが、その双方を見透かすように描いているのが特徴的です。表面的には在日のアイデンティティ問題をあつかった小説のように見え、それが李良枝自身の母国留学の問題や悩みであったかのように読めてしまいますが、よく読むと、遠近や断絶があるはずの複数の人物の内面を透明に描いてしまっていることが、かなり分裂的にも読めます。ですから、このように書いてしまう作家・李良枝は、決して由熙自身ではないでしょう。反対に、李良枝の自我は、由熙からもっとも遠いところにあったかもしれないとも思います。先生がかかげているテーマに関連して問題的吗どうかは判断がつきかねますが、とても重要な作品といえるでしょう。

西先生は、金石範の『地底の太陽』を論じたところで、金石範は「『夢』にはもはや『国境』も『国語』もないことを重々承知していただろう。金石範は夢のなかで、登場人物が何語で話すかまで明示的に語ろうとはしないが、それは夢がしょせんそういうものであって、それこそ、覚醒後にその意味内容の再解釈としてしか夢の記憶など存在しないもの」と言っています。かなり「夢」の役割を限定的に考え、また金石範自身が冷静な判断のもとで自らの創作を行ったという判断のようにも読めますが、私としては、この論述を、むしろ敷衍して、やや逆説的に理解したいと思います。つまり、彼は、「国境」も「国語」もないのではなく、複数の言語を混在させた、決して「国語」にならない言語で夢想したということです。その言語行為が、小説と関連してどのように展開するものなのかを明らかにするのが、今回のテーマ「小説の一言語使用」の核心的な問題ではないだろうかと思えます。

そのことを証明するためには、在日朝鮮人作家の作品以外にも、きわめて特殊な言語状況を経験した／できた作家たち、水村美苗や多和田葉子、リービ英雄や楊逸らの作品を扱うことも必要になるかもしれません。また、夢が記憶の再構成であるならば、問題を小説創作に限定せず、夢、ないしはバイリンガリズムの理論として発展させることも可能でしょう。その場合、「国語」にならない言語で夢想した事例を、数多く参照していくことが必須の作業になると思えます。

## 注

- 1) 渡辺直紀「中西伊之助の朝鮮関連の小説について—特に表記言語と人物の遠近化の関係を中心に」『日本文学』第23輯, 東国大学校日本文学研究所(韓国), 2003年12月, 原文日本語。
- 2) 1930年代前半の台湾でいわゆる「郷土文学論争」が展開される過程では、使用言語の問題として「台湾話文」と「中国白話文」のいずれを使用すべきかという議論もあったが、1934年以降に創刊される台湾芸文連盟機関誌『台湾芸文』およびそこから分裂した左派による雑誌『台湾新文学』で、その論



争を引き継いだのは、日本式の教育を受け、内地留学も経験していた「日本語世代」であり、使用言語の問題もさほど議論されなくなった。この経緯に関する詳細は、橋本恭子『『華麗島文学志』とその時代—比較文学者島田謹二の台湾体験』（三元社、2012）192～198頁、および垂水千恵「1930年代台湾文学における言語問題について—郷土文学論争から『台湾文芸』へ」、『教育研究論集』15（横浜国立大学留学生センター、2008）21～31頁を参照。植民地朝鮮において日本語による創作が発表された舞台としては、英文学者・崔載瑞による日本語雑誌『国民文学』（1941年11月～1945年5月）が有名だが、時局を論じたり報じたりする論文や記事の合間に掲載された日本語による文学作品は、崔載瑞や兪鎮午、李孝石、金史良など日本語での創作が可能だった作家をのぞけば、李石薫や鄭人澤などまだ当時は無名な少数の作家たちのものばかりであった。そのために筆者層を拡大する必要性を感じたのか、この雑誌も初期には朝鮮語創作の掲載も可能として、鄭芝溶や李泰俊、安寿吉、金南天、李箕永ら著名作家たちの詩や小説を発表する号があるほどだったが、それも長くは続かなかった（1942年2月号および1942年3月号のみ）。いうまでもなく、この『国民文学』が刊行されている間にも他の作家らによる朝鮮語創作は続けられていた（雑誌『新時代』を中心に活動していた李光洙など）。ただしその場合にも、当然のことだが、日本語で書いたか、朝鮮語で書いたか、という問題と、対日協力の程度には相関関係はまったくない。朝鮮語で書いてもより深い程度で対日協力にコミットしていた作家は少なからず存在した。逆にまた、そのような時代状況を逆手にとって、当時の朝鮮半島内で頒布される、日本語による各種プロパガンダ媒体を、「より広範な大衆に浸透させるために」朝鮮語版も作成すべし、と主張する意見は数多くあった。このように植民地末期における言語状況は、朝鮮と台湾ではかなりの違いがあったであろうことが推察される。

- 3) 日本人作家の作品で朝鮮人が登場するものとしては、他にもいくつかあげられるが、湯浅克衛の「カンナニ」など、植民地朝鮮を舞台にした短篇は、そのなかでも少し特異なものであろう。これらはすべて日本語で書かれているが、そこに出てくる朝鮮人と日本人は、実際に何語で意思疎通しているかわからない。おそらく日本語でやりとりしているのであろうが、そのようなことが作品のなかであまり問題にならないように見えるのは、登場人物のほとんどが未成年や子どもであることにも関係があるだろう。つまり、拙いながらもなんとか意思疎通していれば、何語を使っているか問題にならない、そのような年齢層の感情のやりとりだからである。湯浅はそのようなことを好んで書いたのである。湯浅の作品のうちこの種のをまとめたものとしては、湯浅克衛（池田浩士編）『カンナニー—湯浅克衛植民地小説集』（インパクト出版会、1995）がある。
- 4) 金石範・金時鐘（文京洙編）『なぜ書きつづけてきたか、なぜ沈黙してきたか—濟州島四・三事件の記憶と文学』、平凡社、2001、148頁。本書には、きわめて貴重かつ興味深い証言が収められているが、金石範や金時鐘の対談、あるいは文京洙によるインタビューが、主として、何を書き、書かなかったか、という内容面だけに話が終始しており、金石範や金時鐘が、1970-80年代にはあれほど拘泥し、数々の文章を残してきた言語使用の問題には、上に引用した箇所を除いて、ほとんど触れられていない。本人たちの現在の記憶のプライオリティはそれとして受け入れるとしても、1970-80年代の彼らの言語論は、バイオポリティクスのエクリチュール理論として、彼らの創作との関係で、いまいちど検証されるべき性質のものを数多く内包していると考ええる。

